

昔むかし、あるところに、おかあさんと男の子がくらしていました。男の子はやさしい子で、みんなから愛あいされていました。

ある日、男の子がいました。

「おかあさん。ほかの子には、みんなおばあちゃんがいるのに、ぼくだけいない。つまんないなあ」

おかあさんは、

「じゃあ、なんとかしておばあちゃんを見つけようね」と答えました。

ある日のこと、男の子のうちの前に、まずしい身なりのおばあさんが物ものいにやつて来ました。おばあさんは、やつれはてていました。男の子は、おばあさんを見ると、「ねえ、ぼくのおばあちゃんになつてくれませんか」とたのみました。そして、おかあさんのところに行つて、

「うちの前に、おばあさんが物ものいに来てるよ。ぼく、あの人におばあちゃんになつてもらうんだ」といいました。

おかあさんは、すぐに賛成さんせいして、そのおばあさんを家の中へまねきいました。おばあさんのからだはとてもよごれていて、のみやしらみがいっぱいかつています。

「ねえ、おかあさん。おばあちゃんをあらつてあげようよ」

ふたりは、おばあさんのからだを、きれいにあらつてあげました。そして、着物についたのみやしらみを、いっぴきいっぴきていねいに取つては、つぼの中に投げ入れました。つぼがいっぱいになると、おばあさんは、

「そのつぼをすててはいけないよ。庭にうめておくんだ。そして、いつか洪水こうずいが来たときには、ほりだしてごらん」といいました。

「洪水だつて。いつ来るの」と、男の子はききました。

「監獄かんごくの門の前にある、ふたつの石の獅子の目が赤くなつたら、洪水こうずいがやつて来るし

しだよ」

男の子はすぐに監獄の前の石の獅子を見に走つていきました。けれど、その目はまだ赤くなつていませんでした。おばあさんは男の子に、

「木で小さな船を作つて、はこに入れてしまつておきなさい」といました。男の子はいわれたとおりにしました。

それからというもの、男の子は毎日、監獄の前に行つて石の獅子の目が赤くなつていなか、たしかめました。

ある日のこと、男の子が、にわとり売りの前を通りかかると、にわとり売りが、「おまえ、どうして、毎日毎日、石の獅子のところへ通うんだい」とききました。男の子は、

「あの獅子の目が赤くなつたら、洪水がやつて来るんだよ」と答えました。にわとり売りは大わらいして、

「そんなこと、しんじられない」といつて、本気にしませんでした。

つぎの日の朝早く、にわとり売りは、石の獅子の両方の目に、にわとりの血をぬりつけておきました。しばらくして、男の子がやつて来ました。そして、石の獅子の目が赤くなつているのを見ると、大いそぎで家にかけもどりました。

おばあさんは、

「さあ、庭にうめてあるつぼを、いそいでほりだしておいで。それから、木で作つた船をはこから出しなさい」といいました。

男の子とおかあさんが、庭のつぼをほりだしてみると、なんと、その中に、美しい真珠しんじゅがぎつしりつまつてゐるではありませんか。小さな木の船は、はこから出したとたん、またたく間に大きくなつて、ほんとうの船になりました。

おばあさんはいいました。

「ふたりとも、そのつぼをモ持つて船に乗りなさい。じきに洪水が来るから。動物たちが水に流されてきたら、みんな船に助けあげてやるんだよ。けれど、黒い髪かみをした人間は、けつして助けるんじやないよ」

男の子とおかあさんは、つぼをかかえて船に乗りこみました。すると、おばあさんは、あつというまにすがたを消しました。

ちょうどそのとき、にわかに雨がふりはじめました。雨はしだいにはげしくなり、天から地面にたたきつけるように、すさまじいきおいでふつてきました。まるで滝のようです。あたりはみるみるうちに水につかつてしましました。

やがて、むこうから、犬がいつぴき流されてきました。男の子とおかあさんは、すぐ

に犬を船に助けあげてやりました。

しばらくすると、こんどは、ねずみの家族が流されてきました。ねずみたちはこわがつて、ちゅうちゅう鳴いていました。男の子とおかあさんは、ねずみたちを船に助けあげてやりました。

水は、もう屋根まで来ています。

一軒の家の屋根に、ねこがうずくまって、にやおにやお鳴いていました。そのねこも助けてやりました。

水はますますふえて、木のこずえまでつかりはじめました。

一本の木のこずえで、からすが羽をばたばたさせながら、かあかあ大声で鳴いていました。そのからすも、船に助けてやりました。

しばらくすると、ミツバチのむれがやつて来ました。雨にびっしょりぬれてほとんどぶことができません。男の子とおかあさんは、みつばちたちも船に入れてやりました。やがて、黒い髪をした男の人が、波にもまれながら流されてきました。

「おかあさん。あの人も助けてあげよう」

男の子がいようと、おかあさんは、

「でも、おばあちゃんがいつたじやないの。黒い髪をした人間はけつして助けてはいけないって」といいました。男の子は、それでも、

「ねえ、助けてあげようよ。あんなふうに水の中を流されていくなんて、見ていられないよ」といいました。ふたりは、その男の人も助けてやりました。

やがて、水は引きはじめました。そして、ついにみんなは船をおりました。動物たちや男は、わかれをつげ、うちに帰つていきました。ひとりのこらずおりると、船はたちまち小さくなつてもとの大きさにもどりました。男の子は、それをまたはこにしました。

さて、助けてもらった男は、男の子が持っていた真珠に目をつけて、横取りしようと考えました。そして、さいばんかん裁判官のところに行つて、うそをならべたて、ふたりをうつたえました。ふたりはとらえられて、ろうやに放りこまれてしましました。

まもなく、ねずみたちがやつて来て、ろうやのかべをかじつて、あなを開けました。そのあなを通つて、犬が肉を運んできました。ねこは、おまんじゅうを持つてきました。おかげで、男の子とおかあさんは、少しもひもじい思いをしなくてすみました。

からすは、どこかへとんでいったかと思うと、手紙を一通くわえてきて、裁判官にわたりました。それは神さまからの手紙でした。中にはこう書かれていました。

「かつてわたしは、物ごいのばあさんのすがたで人間の世界を歩きまわったことがある。そのとき、ひとりの少年と母親が、わたしを家にむかえいれ、少年は、わたしをほんとうの祖母^{そぼ}のようにあつかってくれた。少しもいやがらずに、わたしのからだのよ^よこれをあらい落してくれたのだ。わたしは、この親子が住んでいた罪深い町を洪水でおし流したが、この親子だけは助けてやつたのだ。裁判官よ。このふたりをただちに自由にしてやるのだ。さもなければ、わたしはおまえに不幸をもたらすであろう」

これを読むと、裁判官は、すぐに男の子とおかあさんをよんて、これまでのことをたずねました。ふたりはすべてを話してきかせました。それは、神さまの手紙に書かれてあつたとおりでした。裁判官はすぐにふたりを自由にし、男をきびしく罰^{ばつ}しました。

やがて、男の子はりつぱな若者^{わかもの}になりました。

あるとき、若者は大きな町をおとずれました。その日は、ちょうどおひめさまがけつこんの相手をお決めになるという日で、たくさん的人が集まつていきました。

おひめさまは、ベールで顔をかくしてかごに乗り、たくさんの同じようななかごにまじつて、市場のある大きな広場を通つていくところでした。どのかごにも、ベールで顔をかくしたむすめが乗つっていました。おひめさまの乗つているかごを当てた者が、おひめさまとけつこんできることになつていきました。

若者は、かごの行列を見ているうちに、まんなかのかごのまわりを、みづばちのむれが、むらがつてとんでいるのに気づきました。若者は、そのかごに近づいて、「おひめさまは、ここにいらっしゃいますね」といました。たしかに、おひめさまは、そのかごに乗つっていました。

それから、盛大^{せいだい}なけつこん式が行われ、ふたりは一生楽しく幸せにくらしました。

獅子 ライオン。石の獅子は狛犬^{こまいぬ}のようなもの

出典 『語りの森昔話集1 おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『世界のメルヒエン図書館12』小澤俊夫訳／ぎょうせい